
魔法と世界と君と

高園銀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法と世界と君と

【Nコード】

N3142C

【作者名】

高園銀

【あらすじ】

夕暮れの町、夕焼けに染まる学校。俺はそこで初めて出会った。染まる赤に負けない程輝く、茜色の髪をした少女と……。『私はね、魔法使いなのだよ』その時は頭のおかしな奴だと思ったけど、正しく彼女は本当に魔法使いだった――

ビル街の細い隙間から吹き荒ぶ風は大気を切り裂き、夜空を駆けて行く。冷たい風だった。

深夜、時刻は既に一時を過ぎている。それでも街は眠ることを忘れたかのように動き続ける。車のライトは途切れることなく道路を照らし、人々は夜の街を闊歩する。

不夜城と呼ぶに相応しい街だった。

だが、そんな街にも必ず光の当たらない場所はある。

彼らがいるのはそんな所だった。

空高く聳え立つビル郡の間にぼつかりと開いた空間。一昔前なら子供たちの秘密基地に認定されそうな雰囲気を持っていた。今では社会の荒んだ影の部分を象徴するかのよう、ゴミがあちこちに散乱している。

「待ちくたびたよ……。もうきてくれないかと思った」

彼女がそこに足を踏み入れたとき、男はそう言った。

「……ええ、そうね。私もあなたが来てくれているとは以外だった」

状況を素早く観察しながら少女が軽く返す。

無機質なコンクリートで固められた四方の壁。おそらく一日中日が当たることはないのだろう、地面は湿っていた。

男は勝手に話を進めていく。

「ほら、私は君と話がしたかったんだ。いやまあ、なんせアレを見られてしまったからね……。口封じ、しなきゃいけないあなんてね、ははっ」

男は乾いた笑い声を発し、正面にいる少女と向き合った。

「それは話し合いと言えるのかしら？」

そんな問いかけもこの男には無意味に思えてくる。

「本当に、……本当に来てくれてよかった。お互いによくないだろう？ 追いかけてこは時間の浪費だからね。どうせいつかは終わる

ことだ」

「その通り」

少女は同意する。

異様な光景だった。二人の会話は真面ではない。一見、それは噛み合っていないようで、互いに相手の存在を許さないという点においては見事なほど噛み合っていた。

「この□^{はこ}の中では助けの声はどこにも届かない。……そうそう、逃げようとしたって無駄だからあきらめたほうがいいよ。尤も、このことやってきたぐらいなんだから——お前、死にたいんだろ？」

男は得物^{ナイフ}を取り出した。その刃渡りは十四センチほど。

今まで幾人もの血を吸ってきたそれは夜目にも不気味なほど輝いて見えた。

それ自身が血を欲するかのように。

だが少女はそれを見て、

（まったく……私をどうにかしようとするなら銃ぐらいもってきなさいよね……）

なんて陽気に考えていた。

また、男は少女が能天気なことを頭に浮かべていることを分かっていた。完全になめられているが、だがそれもまた良しとしよう。

そして後の余興に思いを馳せる。自分は絶対に殺されない……そう考えている輩を絶望の淵に叩き落すことが男の趣味だった。快樂殺人者——それが男を最もうまく形容する言葉だろう。

少女がさて、どうやってあの男を片付けようかと思案している時、ぽつりぽつりと顔に冷たいものが降りかかってきた。

……雨。

気分が悪くなる。この場を放棄しさと家に帰ってしまいたい衝動に駆られた。でもそんなことをすると後がひじょくに怖いことになる。それだけは御免被りたい。

早く仕事を終わらせよう。

「——いいわ、殺してみせなさい」

それが戦いの合図だった。

Chapter 1 - 2

男は腹の中に狂気という魔物を飼っていた。それは普段は大人しい癖に、餌の時間になると飼い主も手がつけられなくなるほど獰猛になった。満足するまで行為を止めることなく、それでいて常に冷静に行動する狡猾な魔物だ。

そのすることは異常を極めていた。

幼少の頃、蟻の腹部をプチプチ、プチプチと潰して、小学生の頃、^{かまきり}螳螂の鎌を千切って、中学生の頃、蜂を切り刻んで、高校の頃、道端で死んでいた犬を解体して遊んだ。

誰も魔物と飼い主の相違に気付くことなく、誰もが飼い主を慄き、蔑んだ。これが飼い主——小島敏郎が異常者と呼ばれた所以であり、そしてそれ故に彼は正常を求めた。

だから彼は彼自身の魔物を奥深く封印したのだ。住処も変えた。名前も変えた。そうして彼は生まれ変わった……つもりでいた。

日に日に増してゆく苛立ち、突然の痙攣、夢の中を浮遊し続ける感覚……彼にも原因は分かっていた。

“あいつが暴れている”

いつか腹を食い破って出てくるかもしれないと怯え続けた日々は紛れも無い恐怖だった。

いつそ解放してやれば楽になれるんじゃないのか？ いや駄目だ。今までの苦労が水の泡になってしまう。

そんなことどうでもいいじゃないか。どうせお前は嫌われ者なんだ。違う！

違わない、お前は何のためにこの道を選んだ？

私は……私は普通になりたかった。でもお前は普通にはなれない。

そう……その通りだった。会社ではいつでも除け者にされていた。気味悪い、暗い、気持ち悪い、いつだって影でそう囁く者がいた。

それに……お前は普通になりたかったんじゃないだろ？ お前が本当に望むこと、それは他人を見下してやることで、そのために力が欲しかったんじゃないか？

魔物の言葉には私を虜にするだけの力があつた。

そうかもしれない。私は私を虐げてきた奴らを見返したかつた。

そのためにお前は金や権力といった俗世の『力』を求めた。そのためには社会にうまく適応することが条件だつた。

くくっ……魔物が低い声で笑つた。

奴らと同じ土俵で戦つても一生力は得られないだろうよ。だけだな、お前には奴らには無い優れた力があるじゃないか。それを以つてすれば、平伏させることなんて簡単なんだぜ？

それがとどめの一撃だつた。

パリパリと今まで彼を覆っていた社会性という名の膜が剥がれてゆく。そこから現れたのは一度は封印したはずの魔物そのものだつた。

そして現在、彼は人を壊していた。

自分が怖かつた。とても楽しかつた。

他人を支配するということはなんて素晴らしいことなのだろう。皆違わず泣いた、喚いた、脅した、助けてと救いを求めた。その瞬間だけ、自分が彼らより上であることを認識できる。

彼は快樂に溺れ、自我を忘れていった。結局のところ魔物は彼自身だつた。

そして今日、彼の罪は裁かれることになる。

小島敏郎の計画は失敗した。

Chapter 1 - 3 (前書き)

「Chapter 1 真夏の夜の夢」最終話となります。

Chapter 1 - 3

先に飛び出したのは男だった。

時刻は夜。煌びやかに輝く外界の光はここまでは届かない。それ故、その影は闇に紛れた。低く、素早く、二十メートルの空白が急激に縮小していく。

その動きは見事だった。突進しか知らない攻撃は幾度の実践を経て、一つの技と昇華されていた。常人では逃げられるものではない。一度背中を向ければそこに影の手にした得物ナイフが瞬時にして切りかかるだろう。人を殺す存在、それは紛れもなく殺人鬼だった。

残り五メートル。それは死を意味する距離。

最後が一つの影を飲み込もうとしていた。

だが、少女は迫り来る影を捻じ伏せる。

「a b d o（切り離せ）」

――。

男には何が起ったのかまったく理解できない。今まで手の平に在ったものが、今はもう無い。その事実が受け入れられない。

時間が凍ったような錯覚。

一瞬の出来事だった。少女が何事か呟いた途端、ナイフ自身が意思を持ったかのように虚空へと飛んでいつてしまった。

「……は……、おおおま、お、お前、いい今、何にををを」

狂った再生機のような音しか出てこない。怖かった。目の前の得体の知れない少女が。

「別に特別なことじゃないわ。今のは誰でも知ってる基本中の基本よ」

こいつは何を言っているんだ。同じ人間の言葉とは思えないことを次々と並べてくる。今のが基本中の基本だと？ ナイフが自ら飛

んでいくことが当たり前だと?! 有り得ない有り得ない有り得ないッ!

この女はヤバイ、ここは危険だ、逃げる、逃げる逃げる。危険信号がガンガン鳴り響く。だが、金縛りにあったように足は一步も動いてくれない。

「そうそう、さっきあなた、ここは□^はだと言っていたわね? ……

それはつまり、——あなたにとっても逃げ場は無いつてことよ」

少女が片手を挙げると、周りのビルが一斉に、碎けていった。

「は、はははは……、はいやあああああああ」

それでおしまいだった。男に残っていた人格は風景と共に瓦解していた。

目の前で狂ったように泣いている男を目の前にして少女は小さくため息をついた。

「はあ……」

びしょびしょに濡れた洋服の裾を絞って、水が垂れるのを確認してもう一回ため息。

「はあ……零^{れいき}祁、彼らと呼んでおいて。私はこのまま帰る。結界は残しておくから」

見えない誰かにそう告げると少女は身体を翻してどこかへ去っていった。

いくら夏とはいえ、夜の雨は容赦なく熱を奪っていく。

疲れきった足を無理やり動かして、ようやく雨宿りの出来そんな場所を見つけた。

小さな公園に屋根付きの砂場。

当然誰もいない。

(というか、いたら怖いけど……)

雨に直接当たらなくなっただけで、身体のコまで冷えるような寒さは和らいできた。水分をたっぷりと含んだ靴や靴下に砂がたくさんくっ付いたけど、仕方ない。

今は雨さえ凌げれば大抵のことは我慢できた。

「……はあ」

今日何度目のため息だろう。一日で十才程老けた気がする。

今日はひたすらついてなかった。今日の占いで凶（決して駄洒落じゃない）と出たのが原因かもしれないし、朝に黒猫を三匹もみたせいかもしれない。もしくは昨日の夜スパイダソリティア上級を一発でクリアしてしまった時に運を使い果たしてしまったのかもしれない。いずれにせよ、超を二つ……いや三つ重ねたいぐらいいつてなかった。

まあ……愚痴りたいことはたくさんあるけど、まずは暖をとろう。

「flamma（火よ）」

小さな炎が目の前で生まれた。が、瞬く間に小さくなり……消えた。

「やっぱり火種がないと駄目か……」

探そうにも外は生憎の雨。

（何か、何か燃えそうな物）

公園の隣にある寺に目がいく。

（あれなら燃えそうね……そりゃゴウゴウと）

でも燃やしたら捕まるし。

「今なら放火魔の気持ち分かるわ……」

何かが間違っている気がしないでもないが、今の私にまともな判断を求めないで欲しい。

砂場の囲いに腰掛け、雨がやむまで待つ。

（そっいえばあの男……たしか西島といったっけ？）

数十分前に戦った少女とはとても思えないと忘れ振りだった！

可哀想な男だったと思う。

普通の人になることを求めて、叶うことがないまま暴走した結果

があれだ。普通になれなかった男が悪いのか、それとも普通になることを許さなかったこの社会が悪いのか……。

そこまで考えて不毛な思考だと気付く。

今を騒がす殺人鬼もどうせ時と共に忘れられてゆく。それはいつだって変わらない。時間は物事を平等に消し去ってゆくのだから。そうやって実際にあつたことも無かつたこともすべては幻のようになる。だから今日のことも二週間もすれば氾濫する情報の下に深く埋もれてしまうだろう。

「まるで……真夏の夜の夢………ね」

それを最後に意識は深いまどろみの中に沈んでいった。

Chapter 1 - 3 (後書き)

「Chapter 1 真夏の夜の夢」終わってたわけですが……話の内容がまったくつかめません（汗）

今回は少女は一体何者なのか書いて……行けたらいいですね……。主人公が出てくるのはまだまだ後になりそうだと私のシックスセンスがびんびん伝えてきます。本当にあらすじの部分まで物語を展開できるのでしょうか？ 不安です。

さてタイトルですがあの有名な「真夏の夜の夢」とはまったく関係がありません。ただかっこいいからつけてみようかなとパーク（ゲフン、ゲフン）わけですが、何かを期待してくださった方がいたら申し訳ないところです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3142c/>

魔法と世界と君と

2010年11月25日11時09分発行